



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア最初の印刷新聞「ヴェードモスチ」
Author(s)	秋月, 孝子; Akizuki, Takako; 秋月, 俊幸 他
Citation	スラヴ研究, 32, 54-72
Issue Date	1985
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5146
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113242.pdf



ロシア最初の印刷新聞「ヴェードモスチ」

秋 月 孝 子
秋 月 俊 幸

1. ロシアにおける新聞の起源
2. 「ヴェードモスチ」の発刊
3. 「ヴェードモスチ」の特徴
4. ピョートルの改革と「ヴェードモスチ」

1. ロシアにおける新聞の起源

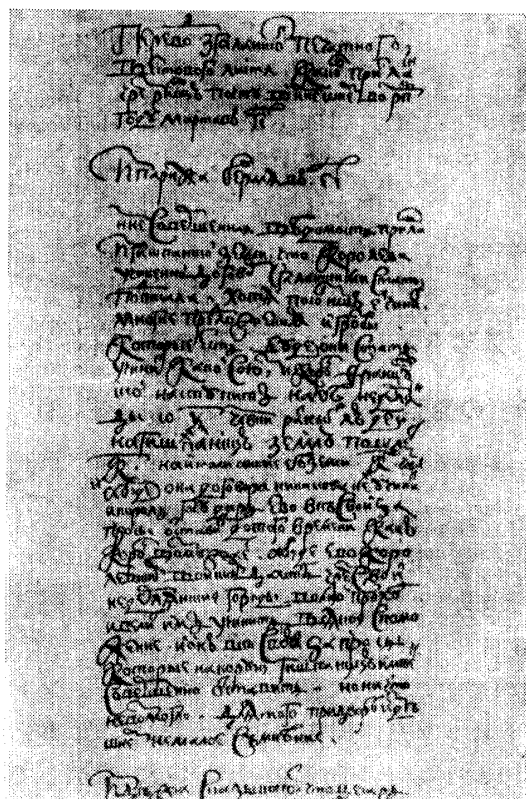
新聞は、現代においては「社会の種々のニュースを定期的に速報する出版物」と定義することができるが、この定義は新聞の歴史の原初的な段階には必ずしもあてはまらなかった。新聞がマス・コミュニケーションの主要な手段となる以前には、それは「定期的」^{ペリオディカル}ではなく、「逐次的」^{シリアル}に発行された場合が多く、また「出版」の代りに手書きで流布したこともあったからである。さらに新聞の内容や発行の目的も、各国の事情により、あるいは発行者や読者が支配層であるか、市民階級であるかによってかなりの違いがみられた。

ロシアについてみれば、新聞の萌芽はすでに17世紀初頭にあったというのが定説である¹⁾。とはいっても、それはモスクワ国家が諸外国に派遣した使節や外交代表を通じて収集した情報を、使節局（Посольский приказ、外務省の前身）が支配階層のために編集したものであった。すでにロマノフ王朝最初のツァーリ、ミハイル・フョードロヴィチ（Михаил Федорович, 1613-1645）治世の初期の頃から外国に派遣されるロシア使節は、任地での見聞のほかその土地で発行されている新聞その他の出版物から、参考となる情報を抜萃して報告することを義務づけられていた。ヨーロッパの辺境にあって、それまで諸外国の事情にうとかったモスクワの支配層にとって、このような情報は単なる興味にとどまらず不可欠のものであり、それなくしては外交上大きな不利益を招きかねなかったからである。たとえば当時のロシアでは西欧の君主の名前さえも不確かなため、使節の信任状の宛名がずっと以前に死亡していた君主の名前になっていたことも稀でなかったという²⁾。そのため1621年以後使節局では各地から送られてくる外国の情報を選択し、或いは外国新聞を翻訳してツァーリに提出するようになったが、それはいくつかの点でわが国の鎖国時代に幕府がオランダ商館長に提出させた「オランダ風説書」と似たところがないでもない³⁾。ただロシアの場合は、日本とは逆に西欧とのかかわり合いを深めるために自らの努

1) Энциклопедический словарь Брокгауза-Ефрона. С.-Петербург. Том VIIA(1892), стр. 802; П. Н. Берков, История русской журналистики XVIII. Мос. и Лнг., 1952. стр. 24.

2) Энциклопедический словарь Брокгауза-Ефрона. Т. XVII (1896), стр. 62.

3) いわゆる「オランダ風説書」は幕府が諸外国の事情を知る情報源になったものであり、それが「クラーントゥイ」とほぼ同じ時代の1644年に始められたことは興味深い。なお「風説書」は1856年までのすべて（約250通）が翻刻され、一方「クラーントゥイ」も「Весги-Куранты」の書名で現在まで4巻（1600-1650年）が刊行されている。



図版 1 1672年の“Куранты”

力でこのような情報を収集したのである。

それはもちろん手書きのもので、幾枚かの紙をつなぎ合わせた巻紙様のものであったらしいが、その後「クーラントゥイ (Куранты)」⁴⁾ という通称でよばれるようになった(図版 1)。「クーラントゥイ」の内容は最初から外国新聞の抜萃記事の翻訳が中心であり、このためにやがて 1631 年頃から西欧の印刷新聞が継続的に使節局に受け入れられるようになった。西欧とくにドイツやオランダでは、すでに 17 世紀初頭から印刷新聞が刊行され始め、その中には内外の政治的社会的事件に関する記事があり、人物や諸事件に関する情報もロシアの外交にとって重要な参考資料となりえたからである。これらの外国新聞の中にはその頃ハンブルグで刊行され始めたばかりの「Ordentliche Post-Zeitung」や「Particular-Post-Hamburger- und Reichs-Zeitung」なども含まれていた。アレクセイ・ミハイロヴィチ (Алексей Михайлович, 1645-1676) の治世期には使節局受入れの外国新聞は 20 紙以上に達していたという⁵⁾。外国新聞の入手は初期の頃は外国派遣の使節を通じて行われていたようであるが、1665 年以降はそのためにわざわざ外国人と契約して外国郵便制度の

4) 「クーラントゥイ」というのはラテン語の Currens から出た言葉で、英語の Current と同じ意味である。この名称がロシアで用いられるようになったのは、オランダの新聞の影響であると思われる。オランダでは 1623 年アムステルダムで政治、商業の情報をのせた “Amsterdamsche Courant” が発行されて以来、多くの主要都市で “Courant” が出されていた。(Энциклопедический словарь Брокгауза-Ефрона. Т. VII (1892), стр. 799; Б. И. Есин, Русская дореволюционная газета, 1702-1917 гг. Мос., 1971, стр. 9)。なお「クーラントゥイ」は “Вестовые письма (報知書簡)” もしくは “Вести (報知)” などとよばれることもあった。

5) Энциклопедический словарь Брокгауза-Ефрона. Т. XVII (1896), стр. 62.

確立がはかられた程である⁶⁾。このいわゆる「クーラントゥイ」は時折中断されることもあったが、1701年まで続けられた。

以上のように、「クーラントゥイ」はモスクワ国家の官庁が国家目的のために諸外国の新聞を抜萃して編集したもので、それが今日でいう「新聞」の名に値するものであるかどうか疑問であり、またどれ程の人の目にふれたかも明らかではない⁷⁾。しかし機能的にみれば、それはたとえ外国新聞の翻訳であったにせよ、外国の最新の出来事を報知する目的で編集されたものであり、ロシアにおける「新聞」の原型とみなしてもよいであろう。「クーラントゥイ」という通称も前述のように⁸⁾西欧の新聞名からとられたものであった。

2. 「ヴェードモスチ」の発刊

以上のように17世紀中には、ロシアの支配層は主として「使節局」が西欧の印刷新聞から抜萃翻訳した情報によって外国のカレントな知識をえていたが、それはわが国の「オランダ風説書」と同様限られた範囲の人々にしか伝わらなかった。いわゆる「クーラントゥイ」は折々にツァーリに提出されたものであり、しかも手書きであったからである。その意味で1702年12月16日ピョートル一世が發布した「クーラントゥイ」の印刷に関する勅令は、ロシアの新聞の歴史にとって記念すべきドキュメントであった。その勅令は次のようなものである。「モスクワ及び周辺諸国の人民に、軍事あるいは全ての事柄について報知するために、クーラントゥイを印刷に付すべし。しかしてこのクーラントゥイを印刷するためにそれぞれの官庁^{ブリカース}において現在いかなることが起り、将来いかなる見通しがあるかを怠りなく僧院局 (Монастырский приказ) に報告し、僧院局はこれらの報告を印刷所に送付すべし⁹⁾。この勅令はそれまでの手書きの「クーラントゥイ」と比べていくつかの重要な改革を求めている。第一は「クーラントゥイ」の情報を広く民衆に周知させることを目的としていることである。第二にそのために印刷が採用されたこと、第三には「クーラントゥイ」がほとんど外国新聞の翻訳にとどまったのに対し、これは各官庁に情報の提供を求めて国内の記事をも対象にしたことである。それは、まさしく本来の意味における「新聞」の刊行を意図したものであった。

このようにして専制君主ピョートルの意志は直ちに実現され、勅令から18日後の1703年1月2日にはモスクワでロシア最初の印刷新聞「ヴェードモスチ」の第1号が発行された¹⁰⁾。

6) 1665年に西欧からロシアへの定期的な郵便送付を請負ったのは、オランダ人ファン・スヴェデン (Jan van Sveden) であった。その結果モスクワ駐在のスウェーデン使節キルブルゲル (Kilburger) によれば、1674年頃にはオランダ、ハンブルグ、ケーニヒスブルクその他の印刷新聞がスウェーデンと同様に週1回づつ確実にモスクワに届けられていたという。(Первая русскія вѣдомости, печатавшіяся въ Москвѣ въ 1703 году. СПб., 1855. стр. 6)

7) 当時の写本の中には「クーラントゥイ」の内容が断片的にみられることから (Первая русскія вѣдомости, стр. 8, 註 (5); Есин, стр. 9), 宮廷貴族の間では「クーラントゥイ」のことはよく知られていたものと思われる。

8) Первая русскія вѣдомости, стр. 7, 註 (4) 参照。

9) Полное собрание законов Российской империи. Серия 1, том 4, № 1921, стр. 201. СПб., 1830. にこの勅令の全文がある。

10) А. Бокрофスキーは、1702年12月27日に発行された「ノッテンブルク要塞の包囲中に起った出

ロシア最初の印刷新聞「ヴェードモスチ」

この「ヴェードモスチ」という名称は必ずしも固定したものではなく、号によって違いがあり、普通は“Вѣдомости (報知)”あるいは“Вѣдомоти присланные чрез (もしくは из)~ (～から到来の報知)”と記された場合がもっとも多い。また“Вѣдомости московские (モスクワ報知)”あるいは“Вѣдомость московская (同)”も少なくない。さらには“Вѣдомости о Митавской осаде (ミタワの包囲についての報知/1705年第34号)”や“Вѣдомости боушской осаде (ボウシュ包囲についての報知/1705年第35号)”, “Реяция (戦況報告)”などのような特別な名称をもつものもみられる。時には単に“Из санктпитербургха” (サンクトペテルブルクより/1707年第23号)のように全く名称を欠くものもある。



図版 2 1703年の“Вѣдомости”の表題紙(註11-12を参照)

来事の日々の記録、すなわち日誌^{ユルナル} (Юрналъ или поденная роспись, что въ мимошедшую осаду под крѣпостью нотенбургомъ, чинилось. Сентября съ 26-го числа въ 1702 году) が、この勅令にもとづいて出された最初の印刷新聞であると考えている。(Вѣдомости времени Петра Великаго. II. СПб., 1906. А. Покровский, “Къ исторіи газеты въ Россіи”, стр. 61)。これはロシア軍がスウェーデン軍の守備するノッテンブルグ要塞 (のちのシュリセルブルグ要塞) を包囲し奪取した9月26日から10月14日までの毎日の記録である。しかしそれは各官庁に情報提供を求めた勅令とは関係がないので、むしろ印刷された最初の「戦史」とみなすべきであろう。

また近年においては、「ヴェードモスチ」の最初の号が1702年12月17日即ちピョートルの勅令の翌日に刊行されたという説も出ている。(П. Н. Берков, История русской журналистики XVIII века. Мос., 1952. стр. 38-43; А. В. Западов (ред.), История русской журналистики XVIII-XIX веков. Мос., 1963. стр. 18)

このことからみれば“Ведомости”という名称は、この新聞の個有名詞というよりは、普通名詞であったと考えることもできる。とはいえ、この新聞の年末の号にはその年の新聞を合綴するための独立した表題紙が付加されたらしく、後述する復刻本『1703年刊のロシア最初のヴェードモスチ』および『ピョートル大帝時代のヴェードモスチ』の各年の始めには次のような長い表題のつけられた場合がある¹¹⁾。即ちそれは「モスクワ国家とその周辺諸国の知識および記録に値する軍事上その他の出来事に関する報知。キリスト暦17**年の1月から始まり同年12月に終る」¹²⁾というものであった(図版2)。これをもってこの新聞の正式の名称とみなすべきであろう。

「ヴェードモスチ」の創刊号は八折版^{オクタヴ}で紙数は4ページ(2葉)、各ページ27行の小さなパンフレットのようなものであった。活字は当時の印刷物に通例の教会スラヴ文字で印刷され、発行部数は1,000部であった。その内容は主としてロシア国内のニュースで、モスクワで鑄造された大砲のこと、モスクワにおける学校教育、ソカ河周辺での銅鉱石の探索、ナルヴァにおけるロシア軍の作戦行動のニュースなどがそれぞれ10行から20行にわたり記されている¹³⁾。(図版3)

この号の外国新聞の記事は、アムステルダムからのニュースが一つあるばかりで、それも白海におけるロシア軍の行動とアルハンゲリ斯克における要塞構築を伝えた記事であった。これらの記事は全て始めにその情報が送られてきた場所が示され、次に日付けを記したのものが、今日の新聞の書き方と似ている。例えば、“Из нарвы, октября в ѣ¹⁴⁾ день” (ナルヴァ発、10月13日付)の如くである。ピョートルがこの新聞にどのような意義を与えていたかは、彼自身がこの第1号を訂正した校正刷が残されていることによっても明らかである¹⁵⁾。第2号以後はロシアの国内記事よりは外国新聞の翻訳が著しく多くなるが、そのことをA.ポクロフスキーは諸官庁の怠慢のせいにして¹⁶⁾。しかし月に3～5回も刊行された新聞に当時の各官庁が毎号情報を送り続けることは困難であったろうし、一方使節局が外国からの情報や外国新聞の翻訳をのせることは「クーラントゥイ」時代からの継続的な事業として容易であり、さらにそのことはピョートル時代には益々必

11) 但し『1703年の「ヴェードモスチ」』の冒頭にのせられた単独の標題紙は、原本に欠如しているので別の年の表題紙を加工して[1703]年のものにしたようである(Первая русскія вѣдомости... 1703. СПб., 1855. стр. 20)。なお E. И. Кацпржак, История книги. Мос., 1964. стр. 224も参照のこと。

12) 原文は教会スラヴ文字であるが、現行の正字法でキリル文字に直すと次のようになる。

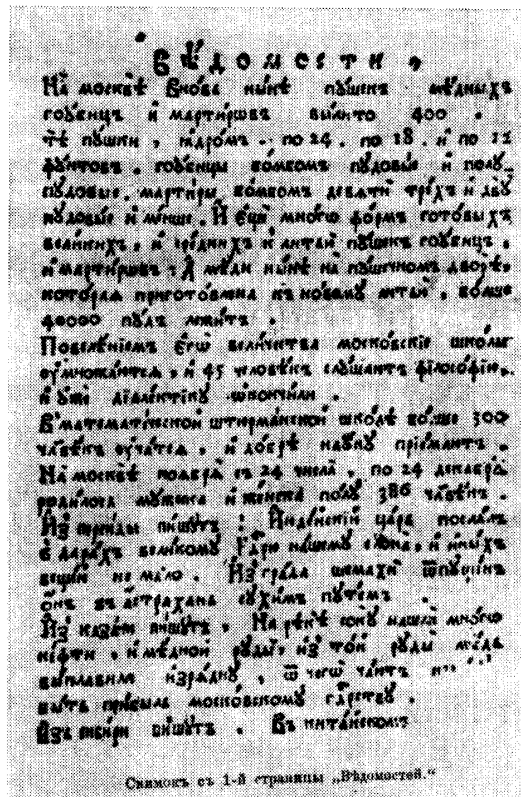
“Ведомости, о военных и иных делах достойных знания и памяти, случившихся в московском государстве, и во иных окрестных странах. Начаты в лето от христа ****, от генваря, а окончены декабрем сегоже года.” **** は教会スラヴ文字で西暦の年号が示されている。このような表題紙が必ずしも毎年の最終号につけられたかどうかは明らかではない。復刻本“Вѣдомости времени Петра Великаго. I-II. СПб., 1903-1906.によれば、そのついているものは1704, 1705, 1707年である。

13) Первая русскія вѣдомоти, стр. 18.

14) ここでは数字は教会スラヴ文字によって表わされ、ѣは13を示す。

15) Первая русскія вѣдомости, стр. 10; Вѣдомости времени Петра Великаго. Вып. I. Мос., 1903. стр. ii.

16) А. Покровский, стр. 62.



図版3 “Вѣдомости” の創刊号
 (二つの版のうちこの版では、アラビア数字が使用されている)

要になったことであろう。ロシアの国内記事はその後も諸官庁から提出された情報よりは各地からの個人の書簡や、戦況報告が主要な情報源となったようである。ある号に国内記事と国外記事がのせられたときは、国内記事を先にし、国外記事の中でもバルト海地方やポーランドのニュースが常に西欧の記事より先にのせられた。

外国新聞からの抜萃翻訳が「クーラントゥイ」時代からの継続であったことは、利用された外国新聞の種類からも明らかである。例えば A. ポクロフスキーは1700年から1704年の期間に、「クーラントゥイ」および「ヴェードモスチ」によって利用された外国新聞の一覧表をあげている¹⁷⁾。それによれば、6種類の新聞はいずれの期間にも共通したものである¹⁸⁾。「ヴェードモスチ」に利用された外国新聞のうちもっとも多く情報源となったのはドイツの新聞であった。そのことはドイツが地理的、政治的にロシアともっとも関係が深かっただけでなく、ドイツでは西欧において最初に印刷新聞が発刊され、18世紀初頭には大都市の多くで新聞が出されていたことによるものであろう。そのほかオランダ、フランス、スウェーデン、イタリア、ポーランドなどの新聞も継続的に受け入れられ、「ヴェードモスチ」のために抜萃されていた。これらの記事により「ヴェードモスチ」の読者た

17) A. Покровский, стр. 38. 1702年はいずれの新聞も編集されていないので空欄になっている。

18) Ordinari Post Zeitung; Relation aus dem Parnasso; [Hamburger] Relation Courier; Die Europäische Relation; Nordischer Mercurius; Folglio Straordinario.

ちはこれまでほとんど知ることのなかった西欧の政治事件や民衆の生活、戦争や災害、気候、風土、産業などについて、不十分なながらも或る程度の知識をうることができたのである。ピョートル一世は外国新聞に目を通し、自ら「ヴェードモスチ」にのせるべき記事に鉛筆で印をつけたといわれている¹⁹⁾。

外国新聞の翻訳は「クーラントゥイ」の時代から行なわれていたので、翻訳官たちは多くの用語、地理的名称、特殊な表現をロシア語に翻訳する問題をすでに解決しており、訳文も当時の民衆語に近く、かなりこなれていて分かりやすいといわれている²⁰⁾。とはいえ、外国の語彙を翻訳せずにそのまま使用した場合もあり、それらのうちにはやがて外来語として定着したものも少くなかったと思われる。外国新聞の抜萃は選択の際に配慮がなされたとはいえ、何らのコメントをつけることなく単なる翻訳にとどめられていた。

前述のように「ヴェードモスチ」は主として使節局で翻訳された外国新聞の記事のほか、僧院局印刷所に送られてくる各種の情報や北方戦役中の戦況報告(реляция)から編集されたが、それらの記事の収集が不定のため、発行も甚だ不定期であった。1703年中には39号が出されたものの、それ以後は年によってかなりの差があり、また1号のページ数も2~22ページと不定であった。発行部数も記事の内容の重要性により50~4000部と大きな違いがみられる²¹⁾。

「ヴェードモスチ」は1711年まではモスクワの僧院局印刷所で印刷されたが、この年ペテルブルグにも印刷局が設立され、ここでも「ヴェードモスチ」の印刷が始められた。しかし両者は必ずしも同一の内容ではなく、異版といえるものであった²²⁾。いずれにせよこの新聞はピョートルの積極的な関与によって刊行を続けた政府新聞であったが、ピョートル死後2年後の1727年には編集権が科学アカデミーに移され、1728年1月2日には新たに“Санкт-Петербургскія вѣдомости”の第1号が出された。しかしモスクワで再び“Московскія вѣдомости”が発刊されるのは漸く1756年4月26日のことである。

3. 「ヴェードモスチ」の特徴

では次に「ヴェードモスチ」の外的特徴ともいえる形態、活字、図版、異版、発行回数、部数などのことをいまま少し詳しくのべる前に、この新聞の残存状況および復刻本についてふれておきたい。

20世紀初頭には「ヴェードモスチ」の完全な揃いが帝国公共図書館(Императорская Публичная Библиотека)即ち現在のシチェドリソフ図書館(Библиотека Публичная им. М. Е. Салтыкова-Щедрина)に、また不完全な揃いがモスクワとペテルブルグのいくつかの官庁の図書館に保存されていたという²³⁾。後者のうちとくにモスクワの宗務院印刷局の図

19) Е. И. Кацпржак, История книги. Мос., 1964. стр. 226.; А. Н. Неустроев, Историческое розыскание о русскихъ повременныхъ изданияхъ и сборникахъ, библиографически и въ хронологическомъ порядкѣ описанныхъ за 1703-1802 гг. СПб., 1874. стр. 1.; Энциклопедическій словарь Брокгауза-Ефрона. Т. VII^а (1892), стр. 610.

20) Первые русскія вѣдомости, стр. 19.; Вѣдомости времени Петра Великаго, I, стр. iii.

21) А. Покровский, стр. 77-78.

22) Там же, стр. 90.

23) Вѣдомости времени Петра Великаго, I, стр. iv.

ロシア最初の印刷新聞「ヴェードモスチ」

書館には多数の「ヴェードモスチ」の校正刷さえ残されていた。

ピョートル一世時代の風潮を反映する貴重な資料として、「ヴェードモスチ」の復刻が“Первыя русскія вѣдомости, печатавшіяся въ Москвѣ въ 1703 году”という書名で始めて刊行されたのは1855年のことであった。これはペテルブルクの帝国公共図書館がモスクワ大学創立100年を記念して出版したもので、この新聞の第1年目にあたる1703年刊行の39号分を、文字の形や大きさはもとよりページや行に至るまで可能な限り正確に復元したものである²⁴⁾。これは宗務院印刷局において600部印刷されたが2ヶ月間で全部売切れたという²⁵⁾。

「ヴェードモスチ」の全期間(1703-1727)にわたって復刻が企てられたのは20世紀初頭のこと、それはモスクワの宗務院印刷局がピョートルの偉業をたたえるためにこの新聞の創刊200年を記念して刊行したものであった。書名は“Вѣдомости времени Петра Великаго, въ память двухсотлѣтїя первой русской газеты”となっており、1903年に第1巻(1703-1709)が、1906年には第2巻(1708-1719)がそれぞれ、В. ПогореловとА. Покровскийの解題を付して出された。しかしその第3巻が刊行されたかどうかは明らかではない²⁶⁾。これは原本に従って教会スラヴ文字と俗体文字を用いて復刻したものであるが、1ページ2段組で組まれており、活字の大きさや組方も必ずしも原本の忠実な復刻ではない。では次に「ヴェードモスチ」の外的特徴に移ろう。

(i) **活字** 上記の「ヴェードモスチ」の復刻版をみて直ちに気付くのは、それがわれわれの見慣れたロシア文字の代りに、古めかしく、しかもいろいろな符号を付した教会スラヴ文字で印刷されていることである(図版3)。このことはとくに初期の「ヴェードモスチ」についていえることで、1703-1709年までの分は全て教会スラヴ文字によって印刷されている。しかも原本ではこの文字にも外形の異なる2つの字形、すなわちモスクワ風の文字とキエフ風の文字があり、後者はかなり不揃いの活字で6号分(1703年1月2日、4月5日、4月18日、4月26日、5月1日、6月27日)しか使用されなかったという²⁷⁾。В. Богорев(В. Погорелов)は「これらの教会スラヴ文字が小さくてしばしばすりへっており、ときにはぞんざいに印刷されている」ことをピョートルの儉約性と外形よりは内容を重視し、緊急性を要求した彼の性格に帰している²⁸⁾。

1710年の第2号からは、われわれの見慣れたロシア文字(俗体文字 Гражданской шрифт)による印刷があらわれ始めるが、1714年まではなお教会スラヴ文字が混っている。後者の多くは戦況報告(реляция)である。俗体文字による印刷はロシアではすでに1707年頃から採用され、すでに幾冊かの本が出版されていたが、このような「ヴェードモスチ」における俗体文字使用の遅れは、カツプルジャク女史によれば「古い文字に慣れた人

24) Первыя русскія вѣдомости, стр. 19. 「ヴェードモスチ」の1703年分は2つの異版の完全な揃いが帝国公共図書館に残されていた。

25) Неустроев, стр. 3. 北大スラブ研究センターは1983年にその1冊を入手した。

26) これは Slavica-Reprint, Nr. 38-39 として1970年に再復刻されたが、第1-2巻のみである。

27) Первыя русскія вѣдомости, стр. 15. 本書の巻頭には第1種文字としてキエフ風文字(1703年1月2日)が、第2種文字としてモスクワ風文字(1703年12月29日)の見本が示されている。

28) Вѣдомости времени Петра Великаго, I, стр. iv-v.

々にはキリール文字で印刷された新聞の方が読み易いことが考慮されてのことであった²⁹⁾。このようにして多くの人々に関心のありそうな重要なニュースがのせられた号は多部数が発行されただけでなく、なお暫くは教会スラヴ文字で印刷されたのである。

(ii) **形態** 次に「ヴェードモスチ」の外形についてみれば、その大きさは今日の新聞と比べると非常に小さく、全期間を通じて8折版であった³⁰⁾。これは当時「ヴェードモスチ」のもっとも大きな情報源となっていたドイツの新聞の影響を受けたものといわれている³¹⁾。しかも印刷部分周辺の余白は非常に少なく、ページ数は普通は4～16ページであった。このような小冊子風の体裁はわが国で幕末期に木版で出版された「官版バタビア新聞」や「中外新聞」などと似たところがあり、しかもそれらが外国新聞の翻訳をのせていたことでも共通している。

(iii) **刊行回数** 刊行回数は年によって大きな変動があり、初期の頃は月に2～4回が多かったが、1708年以降は月1～2回となりとくに1718年には僅か1号しか出されていない。しかし翌年には再び40号が出され、また1720年には70号のピークに達している³²⁾。そのほかモスクワとペテルブルクの異版や無番号の付録（戦況報告など）もあって、発行は非常に不定期であったといえる。

(iv) **発行部数** 「ヴェードモスチ」の発行部数も報道される記事の重要性によってかなりの変動があり、ある場合には僅か30部しか印刷されなかったかと思うと、他の場合には4000部に増加したことがあった³³⁾。概して最初のころは部数が多く1000～2000部印刷されたが、1705年以降になると数百部に減少したようである。

当時としてはこのように多くの部数を印刷した「ヴェードモスチ」がどのように配布されたかということは、大変興味のあることである。このことについてA.ポクロフスキーは印刷局に残された資料にもとづいて1708年以降数年分について発行部数と寄贈部数、販売部数、残部、販売金額を調査した表をあげている。ピョートル一世は1702年12月に「ヴェードモスチ」を印刷するにあたり、僧院局の印刷所に対し、「寄贈ののち残ったヴェードモスチは然るべき値段で民間に売却すべし」と命じていたのである³⁴⁾。ポクロフス

29) Кацпржак, История книги. стр. 192. ここでは「キリール文字」という言葉は現行のロシア文字以前の古い字体を指している。本稿でいう「教会スラヴ文字」のことである。

30) Первые русскія вѣдомости, стр. 14.; Вѣдомости времени Петра Великаго, I, стр. iv. その大きさは Кацпржак によれば 16×10 cm である。当時は8折版にも大・中・小があったが(E. И. Шамурин, Словарь книговедческих терминов, Москва, 1958, стр. 102), それにしても普通の8折版よりは小さいようである。

31) А. Покровский, стр. 41. ポクロフスキーによれば当時ドイツの新聞の多くは8折版であり、フランスは4折版, オランダやイタリヤでは全紙であった。

32) 各年の発行回数や各号のページ数は, Вѣдомости времени Петра Великаго, I-II による調査のほか, “Описание изданий напечатанных кириллицей, 1689-январь. 1725 г., Мос. и Лнг., 1958., “Описание изданий гражданской печати, 1708-январь 1725 г., М. и Л., 1955” 及び П. Пекарский, Наука и литература въ Россіи при Петрѣ Великомъ. Том II. СПб., 1862. (Republisht 1972 by Oriental Research Partners) によって知ることができる。

33) А. Покровскийによれば, 1703年の第10号(3月22日)の校正刷(印刷局図書館所蔵)の末尾には赤インクで「このヴェードモスチは4,000部印刷される」と記入されている(Вѣдомости времени Петра Великаго, II, стр. 77)。

34) А. Покровский, стр. 61.

ロシア最初の印刷新聞「ヴェードモスチ」

キーが調査した1709年分の表は次の通りである³⁵⁾。

1709年	No.	発行部数	寄贈分	売却数	残部	値段
	1	600	263	332	50	1ジュニガ
	2	352	65	239		2
	3	600	177	436	80	2
	4	300	174	222		1
	5	500	155	364	5	2(?)
	6	400	176	222		1
	7	250	163	101	30	2
	8	150	168	23	55	1
	9	500	278	318		1
	10	300	147	149	28	2
	11	2500	637	1328	566	2
	12	2500	275	1316	911	6

各号のそれぞれの数字を加えると示された発行部数をこえてしまうが、それは実際発行部数を示すものであろう。ともかくもこの表によって「ヴェードモスチ」の発行部数と配布の状況がある程度うかがい知ることができるが、1711年には寄贈部数は著しく少くなり、代わりに残部が増加している。いずれにせよ、この新聞を読む機会があったのは教養のある貴族階級もしくは商人階級であったと思われるが、手書きの「クーラントゥイ」の情報さえある程度は貴族間に流布していたことを考えると、印刷新聞「ヴェードモスチ」の内容は想像以上に広く世間に知られた可能性がある。

(v) **異版** 前にも記したように1703年の「ヴェードモスチ」については2種類の異版の完全な揃いが帝国公共図書館に残されており、これらにもとづいて『1703年のヴェードモスチ』が復刻された。この場合の異版というのは、数字を教会スラヴ文字であらわした版とアラビア数字を使用した版の2種であったことが、復刻版の末尾にのせられた両版の差異を示した一覧表から知られる³⁶⁾。すでに1702年12月27日に刊行された「ノッテンブルク要塞の包囲中に起った出来事の日誌^{ユルナル}」も、教会スラヴ文字による数字とアラビア数字を用いた2種類の版がそれぞれ500部ずつ印刷されており³⁷⁾、そのことは「ヴェードモスチ」の場合も同様であったと思われる³⁸⁾。ただこのような数字の表示の違いによる異版が何時まで続いたかは復刻版からは知ることができない。とはいえ1705年の第6号からは、本文中の数字は教会スラヴ文字のまま、各号の末尾に示された発行の年と月日は全てアラビア数字となっており、また1710年の第2号からは俗体文字による「ヴェードモスチ」が始まるので、遅くともその頃までにはこの種の異版はなくなったと思われる。

35) Там же, стр. 80.

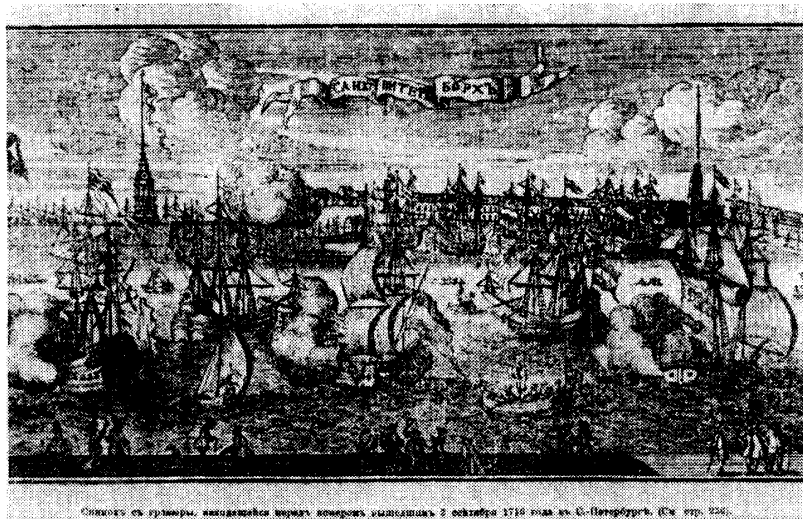
36) “Первая русскія вѣдомости” の末尾に4ページの対照表あり。

37) Описание изданий напечатанных кириллицей, 1689- янв. 1725 г., стр. 80.

38) “История книги” の著者カツブルジャク女史は、ロシアの本の中でアラビア数字を用いたのは1703年中に刊行されたЛ. マグニツキーの「代数学」(Арифметика) が最初であるとのべているが(Кацпржак, История книги, стр. 224), これは誤りである。

もう一つの異版は「ヴェードモスチ」をモスクワとペテルブルクの印刷所で印刷したことからくる内容上の異版である。1711年ピョートル一世はペテルブルクにも印刷所を設立することを命じ、モスクワから設備の一部や印刷工を移転させた³⁹⁾。それとともにこの都市でも「ヴェードモスチ」の印刷が開始された⁴⁰⁾。その最初の号は同年の5月11日にあらわれたが、これはモスクワで5月4日に発行された第6号の異版で、内容は後者の再録のほかに、「戦況報告」が補足されている。この年発行された15号の「ヴェードモスチ」のうちペテルブルクでは第6、9、11、14号の異版が無番号で出され、その中には単なるモスクワ版のひき写しにすぎないものもあった⁴¹⁾。しかし1711年ころからは、主客が転倒し始めてペテルブルク版が先行するようになったが、その内容は全く異った場合もあり、また一方で印刷された号が他方で印刷されなかったこともあった。しかしいずれにせよその後はペテルブルク版が優位をしめ、紙名もかつての“Вѣдомости Московскіе”が蔭をひそめて“Санктъпетербурхъ вѣдомости”と記される号が多くなったのである⁴²⁾。

(vi) 挿絵 「ヴェードモスチ」には僅かながら銅版によるカットや挿絵の描かれたものがある。初期のころは、ページの余白を埋めるために花柄や唐草模様のカットが描かれたが、のちにはペトロパブロフスク要塞やペテルブルクの風景(図版4)、ロシアとスウェーデン艦隊の海戦などの銅版画をのせた号があらわれた。ピョートル一世がオランダから招聘した銅版術師スホネベック(A. Схонебек)の指導で、1700年以降はモスクワでも各種の地図や戦争画が銅版で印刷され始めていたのである⁴³⁾。



図版4 ペテルブルクの銅版画(1716年9月3日の“Вѣдомости”に掲載)

39) Кацпржак, История книги, стр. 233.

40) 『1703年の Вѣдомости』の解説者はこれを「最初のペテルブルグ報知」とよんでいる。(Первыя русскія вѣдомости, стр. 21)

41) А. Покровский, стр. 90.

42) 前にも記したように、「ヴェードモスチ」はこの新聞の個有名詞とは考えられず、紙名は不定であった。

43) Кацпржак, История книги, стр. 229-230.

4. ピョートルの改革と「ヴェードモスチ」

ピョートル一世の治世期は、古いロシア社会の中に西欧の制度、科学技術、産業が急速に導入されたいわば近代化の時代であった。それはピョートルが幼少の頃にしばしば通ったといわれる「外国人居留地」^{ネムツカヤ・スロヴオダー}で植えつけられた西欧の科学・技術に対する異常な関心が、トルコおよびスウェーデンとの戦争の過程でロシアの富国強兵のために大いに役立つことになり、専制的ツァーリズムの土壌で彼の強烈な個性が最大限に発揮されたことによるものであった。彼の実際の治世の期間は20年にわたる「北方戦役」に終始したので、近代化はまず兵制改革や造船、造兵工業などの軍需品生産から始められ、次いでその基礎となる鉱山開発、冶金工業に大きな努力が払われた。さらに富国のために各種の産業を興し、そのために多数の外国人産業家や技術者が招聘された。とくに1697-1698年にピョートル一世自らも参加した250人にのぼる西欧歴訪の大使節団は、ロシアの貴族や官吏の子弟に西欧の文明を学ばせ、多数の外国人技術者を雇傭する機会を与えたことでロシアの近代化における画期的な企てとなった。

ピョートルによって始められたこのような近代化は、単に軍事や産業の分野にとどまらず、行政改革や教育、改暦、風俗的な面にまで及んだ。そこには古いロシアに対する文明開化の意図がみられ、富国強兵のための西欧の文物導入という現象において、わが国の幕末から明治初年にみられた近代化の過程と酷似している。西欧文化の精神的基盤が軽視されたことも同様である。明治3年(1870)開拓次官黒田清隆は樺太方策をのべた二つの上申書の中で、わが国の国力充実の方策をはかるために、天皇自らが大臣たちや多数の留学生を具率して列強諸国に遊学することを提案した。そこには150年前にロシアを強大な国家に導いたピョートル一世の先例が明確にのべられている⁴⁴⁾。ピョートルの事績はわが国でもすでに18世紀末から知られていたのである⁴⁵⁾。岩倉使節団の実現はこの意味でピョートルの使節団と軌を一にするものであった⁴⁶⁾。しかし両国の近代化はこのような類似にも拘らず、一方が個性的な専制君主によって遂行されたのに対し、他方は集団指導的な藩閥政府により主導されたことにおいて著しい対照をなしている。ロシアの場合は多くの改革が開明的な専制君主であったピョートル自身の発案で、しかも彼自身の参加によって行われたことが少なかったのである。そのことは「ヴェードモスチ」の発刊についても同様であった。

ただここで指摘しておかねばならないのは、ピョートルの改革が古いロシアの風土に西欧文明を突然に持ち込んだわけではないことである⁴⁷⁾。すでに17世紀初頭から西欧との

44) 黒田清隆「履歴書案」(国立国会図書館憲政資料室「黒田家文書」のうち)。

45) わが国の文献でピョートル一世について最初に触れたのは、工藤平助の『赤蝦夷風説考』下巻(天明元年/1781)である。その後寛政から文化年間にかけてあらわされた『魯西亜国志』、『魯西亜国志世紀』、『魯西亜本紀』、『帝爵魯西亜国誌』などにもピョートルの事績がのべられている。しかし黒田清隆のピョートル一世についての知識は、福沢諭吉の『西洋事情』によるものであったろう。

46) この二つの使節団はいずれも条約交渉に失敗したにも拘らず、西欧諸国の文明を組織的に導入するきっかけとなったことでも興味深い。

47) 鳥山成人「ロシア帝国の成立と発展」, p. 222 (岩間徹編『ロシア史』(新版)東京, 1979所収); 鳥山成人「ピョートル伝とピョートル改革」, p. 7 (「えうゑ」12号, 1983年10月)

交渉の過程で、あるいは隣国ポーランドを通じて西欧文化は徐々にロシアに滲透しつつあり、多数の西欧人も早くから軍人、工匠、職人、家庭教師その他の専門家としてロシアに定住していた。幼いピョートルの周辺にも西欧風の好みをもつ政治家がおり、さらに彼の好奇心を満足させた外国人たちの居住区さえ存在したのであった。とはいえこのような西欧的、ラテン的な風物が流入することに対して、伝統的なロシア社会はますます保守的にこれに反応した。そのもっとも大きな勢力は第3のローマの正統を自任し、反ラテン主義に徹していたロシア正教会であった。そしてこれはロシアの風土と密着してロシア人の精神的な胎盤となっていたのである。

「ヴェードモスチ」が刊行され始めたころの一般的なロシア人の西欧観について、A. ポクロフスキーは次のようにのべている。「当時ばかりでなく、それからかなりの後になってもロシアでは西欧のことは余りに僅かしか知られていなかった。ロシア人にとって西欧は普通何か恐ろしいものであるかのように思われていた。18世紀の始めにおいてはもっとも教育のあるロシア人の間にさえ西欧のことをすこぶる疑わしい眼でみていた人々がいた。カトリック教徒を正教徒の敵であり、あたかも悪魔の一族であるかのようにみなす古い観念が、ロシア人を西欧世界から遠ざけていたのである」⁴⁸⁾。このような時にあたりピョートル一世が意図した西欧の文物の積極的な導入による改革は、その信奉者と敵対者の間の激烈な斗争を予想させるものであった。このような理由で A. ポクロフスキーは「ヴェードモスチ」発行の目的の一つがロシア人に西欧生活の実際を知らせることにあつたと考え、上記の文に続けて次のようにのべている。「“ヴェードモスチ”は、人間の住んでいるところではどこでもありふれた人間の生活が営まれており、西欧には恐ろしいことや異常なことは何もないことを明確に示した。このような“ヴェードモスチ”の思想は意識的にあるいは無意識に表現されていたにせよ、非常に重要なことであった。かかる見地から“ヴェードモスチ”をみれば、その内容の大部分が何故に西欧に関するものであつたかが十分に理解されるであろう」⁴⁹⁾。このように「ヴェードモスチ」は外国の新聞記事の中から、ロシア人に知らせたい西欧の政治事件や民衆の生活をピックアップして翻訳し紹介したのである。それは表面的にみれば、かつて使節局が西欧の新聞から記事を抜萃翻訳してツァーリに提出した「クーラントゥイ」と同様であるが、印刷配布され、販売さえされた「ヴェードモスチ」の場合には、西欧に関する情報は単なる外交の参考資料とは異り啓蒙的な意味をもっていたのであった。

しかしながら「ヴェードモスチ」の目的は西欧の理解にのみあつたわけではない。B. ボゴロフは、このことについて次のようにのべている。「ピョートル大帝は自分の改革の大きさと困難さを理解して、その促進のためにあらゆる可能な方策を求めた。最初の新聞の創刊も彼の計画の実現に不可欠な強力な手段であつた」⁵⁰⁾。彼によれば、ピョートル一世は改革の大いなる成功のために、自分の指導理念を国民に周知させ、それとともにロシア社会に西欧の生活を知らせ、その方向へ誘導することを必要と考えたというのである。それ故に「ヴェードモスチ」は西欧関係の記事のほか国内の改革についても、ピョートル

48) А. Покровский, стр. 93-94.

49) Там же, стр. 94.

50) Вѣдомости времени Петра Великаго, I, стр. iv.

が創設した新編成のロシア軍や艦隊の北方戦役における成功を喧伝し、またロシアにおける商業の拡大、工場の建設、有用鉱物の発見などの実績を誇らねばならなかった。このような国内の記事は、もちろん「クーラントゥイ」にはみられなかったものである。その情報源は各地からの報告や書簡であり、その中にはピョートル一世自身や彼の側近もしくは高官たちの書簡を要約したものが多数含まれている。とくにピョートル一世は喜ばしい出来事があったときは、しばしば多くの人々に手紙で知らせたので、「ヴェードモスチ」に収録された彼の書簡はすこぶる多かった⁵¹⁾。これらの書簡は初期の頃は情報源を示さずに利用されたが、1708年以降にはピョートル一世の名前を明示して、その書簡の要約ではなく、「抜萃」をのせたものがあらわれてくる。1709年の第11号(7月2日発行)および第12号(7月15日発行)には、同年6月27日の有名なポルタヴァ会戦の勝利についてピョートル一世が皇太子に知らせた書簡がのせられている⁵²⁾。

以上のようにピョートル一世は、自らの改革を推進する手段として「ヴェードモスチ」を創刊し、自らの記事でその紙面を飾ったが、この新聞に対する彼の関与はそのことにとどまらなかった。彼が自ら朱ペンをもって第1号を校正したことはすでにのべたところであるが、そのような例は他にいくつもみられるばかりでなく⁵³⁾、彼は使節局で翻訳すべき外国新聞の記事を選んで鉛筆で印をつけることさえしたのであった⁵⁴⁾。その意味でピョートル一世はこの新聞の事実上の監修者あるいは編集者の一人であったといえることができるが、そのことは彼がこの新聞にいかにか大きな意義を与えていたかの証左となるであろう。

「ヴェードモスチ」はまたロシアの出版史からみても画期的なもので、ピョートル一世の改革の一端を示している。モスクワにおける図書の印刷はすでに16世紀後半から行われ、17世紀中を通じて少なからぬ図書が刊行されたが、そのほとんどは福音書や祈祷書、儀式書などの教会関係の出版物であり、世俗的な本は甚だ稀であった⁵⁵⁾。しかもそれらはいわゆる教会スラヴ文字、即ち今日のロシア文字とは異体の活字で印刷されていたのである。

17世紀末になるとあらゆる分野の教科書や学術書に対する要望が高まってきたが、当時はそのような本は西欧からもたらされたもので、ごく僅かの学者によって利用されたにすぎなかった。ピョートル一世は1697年オランダを訪れた際に、出版業者たちにロシア語の書物を印刷してロシアに無税で輸出することを呼びかけ、その結果テッシング (Jan van Tessing) やコピエフスキ (F. Kopiewski) の印刷所から「世界史概観」(Введение крат-

51) А. Покровскийは、ピョートル一世やアブラクシン伯爵 (Ф. М. Апраксин) の手紙がどのように要約して「ヴェードモスチ」にのせられたかについて実例をあげている。(А. Покровский, стр. 50-55)

52) Вѣдомости времени Петра Великаго, II, стр. 24-30.

53) Первые русскія вѣдомости, стр. 10; А. Покровский, стр. 48-49 (ピョートル一世による記事の修正の事例を示す); А. Б. Западов (ред.), стр. 20.

54) Неустроев, стр. 1; А. Покровский, стр. 44; Кацпржак, История книги, стр. 226.

55) モスクワで印刷された最初の非教会関係の本は、1634年印刷局の工匠 Ф. Бурцов が編集、印刷した「アズブカ」(Азбука)であった。2番目は1647年に出された歩兵操練に関するドイツ書の翻訳である(Кацпржак, История книги, стр. 215; L. Febvre, & H.-J. Martin, L'apparition du livre. Paris, 1971. p. 291.)

56) Кацпржак, История книги, стр. 229-230; Пекарский, том I, стр. 13-16, том II, стр. 12-14.

кое во всякую историю, 1699), 『羅露独辞典』(Латинско-русско-немецкий словарь) と『羅露蘭辞典』(Латинско-русско-голландский словарь), 『ラテン文典』(Латинская грамматика), 『イソップ物語』(Притчи Эссоповы) (以上4点いずれも1700年刊), 『航海教科書』(Книга учащая морского плавания, 1701) などが刊行され、ロシアに搬入され始めた⁵⁶⁾。

一方モスクワの印刷所でも1694年と1696年には、始めて初等読本が宮廷、貴族の子弟たちのために印刷され、1701年には学校用の教科書としてラテン語、ギリシャ語の入門書が発行された。そして1703年にはともに数学、および地形測量の分野の最初の教科書とみなされるレオンチー・マグニツキー(Леонтий Магницкий)の『アリスメティカ』(Арифметика) および航海学校用の『対数表』(Таблица логорифмовъ) が刊行されたのである⁵⁷⁾。それらはなお教会スラブ文字によっていたとはいえ、ピョートルの治世期に刊行された300冊以上にのぼる非宗教書のはしりであった。しかし1703年1月に印刷発行を始めた「ヴェードモスチ」はこれらに先立つものであり、ロシアの印刷史上に占める先駆的意義は明らかであろう。『本の歴史』の著者カツブルジャク女史は、「当時本の製作と教育を手中に収めていた教会人の考えでは、アラビア数字を用いることは異端であった」とのべ、1703年のマグニツキーの『アリスメティカ』において始めてこの数字が使用されたとのべているが、この点についても先にのべたように、実際には「ヴェードモスチ」の二つの版のうちその一つは最初からアラビア数字を使用していたのである。

非宗教書が印刷されるにつれて必要となったのは、教会スラブ文字を簡略化し、西欧のラテン文字に類似した活字を作ることであった。すでにアムステルダム版のロシア語刊本の中でその傾向があらわれていたが⁵⁸⁾、1707年にはポーランド人コピエフスキ(F. Kopiewski) がアムステルダムから印刷所の諸設備をもってモスクワに到来し、その折に新しい俗体活字を持参したという。その結果モスクワでも新活字の鑄造が始まり、1707年からモスクワの印刷局で非宗教書が簡略化された俗体文字によって印刷され始めた。その後俗体活字はいくつかの修正が加えられ、1710年にはピョートル一世自身によって最終的な字形が決定された⁵⁹⁾(図版5)。彼はこれまで使用されてきた教会スラブ文字および俗体活字の全ての字形を印刷した活字見本を提出させたのち、自ら教会スラブ文字の全部とラテン文字の特徴を有する n (н) と m (т) を抹消して俗体活字を確定し、次のように指示したのである。「これらの文字をもって芸術的、技術的書物を印刷すべし、しかして抹消されたる文字を上記の書物において用うべからず」⁶⁰⁾。「ヴェードモスチ」は1710年2月1日発行の同年第2号からこの最終的に確定された俗体活字によって印刷され始めたが、これはピョートルの指示に従った最初の出版物であったのかもしれない。前述のように「ヴェードモスチ」にはなお1714年までは、時折は古いキリール文字によって印刷された「戦

57) Кацпржак, История книги, стр. 224.

58) Там же, стр. 228 に示されたアムステルダム版の『イソップ寓話』(1700)の活字は、すでに俗体文字とかなり近いものである。

59) А. Г. Шицгал, Репертуар русского типографского гражданского шрифта XVIII века. Мос., 1981. [стр.] x, [20].

60) Кацпржак, История книги, стр. 233.



図版 5 1710年ピョートル一世が決定したロシア文字の活字

況報告」がみられるけれども、この新聞が新しい俗体活字の普及に大きな影響があったことは疑いないところである。

以上のように「ヴェードモスチ」は、ロシアにおける非宗教書印刷のなかでもっとも初期の段階に属していただけでなく、新活字の採用と普及にも大きな影響を有したのであった。そのことは古代的な教会スラヴ語に代る世俗的な新しいロシア文章語の定着についても同様ではなかったかと思われる⁶¹⁾。

The First Printed Russian Newspaper “Vedomosti”

Takako & Toshiyuki AKIZUKI

The origin of the newspaper in Russia can be traced back to the early 17th century. Since 1621 the Posol'skii prikaz (Foreign Office) began to submit to Czar

61) 「ヴェードモスチ」で用いられたロシア語の文体が古い文献の教会スラヴ語と著しく異っていることについて、B. ポゴレロフは次のように述べている。「そのことは内容の新しさによるばかりでなく、この新聞を編集したのが僧侶ではなく使節局や印刷所の世俗人であったという事実によるものである。これらの諸事情によって“ヴェードモスチ”は政治・文化史や文学・言語学史にとっても大きな意義をもっている」(Вѣдомости времени Петра Великаго, I, стр. iii)

Mikhail Fedorovich news items extracted and translated from foreign newspapers. These news items, which were later called “Kuranty (currents)” after Dutch newspapers, soon became one of the main information sources on Western countries in Russia. In the latter half of the century more than 20 foreign newspapers (German, Dutch, French, Polish, Swedish, Italian and so on) were regularly imported to Russia in order to translate and compile articles for the “Kuranty”. Though it included valuable information, the “Kuranty” in manuscript was known only to a small group of the governing class. In some respects it is similar to the “Oranda Fusetsu-gaki” (Information from Holland) which Dutch commercial captains, residing in Nagasaki during the period of Japanese isolation, submitted annually to the Shogunate government.

On the 16th of December in 1702 Peter I ordered the Monastyrskii prikaz (Monastery office) to print the various news items sent by the Foreign office and other government offices in its printing house. Thus the first issue of “Vedomosti (News)” was published on the 2nd of January in 1703 as a small pamphlet of four pages in octavo. It differed considerably from the preceding “Kuranty” in the fact that it was *printed* in order to inform *the public* rather than the governing class of *domestic* and foreign news.

The “Vedomosti” was issued irregularly until it ceased publication in 1727: several times a month in the early years and 1 or 2 times a month after 1708. In 1718 only one issue was published, but in 1720 the number of issues reached a peak of seventy.

The number of copies of the “Vedomosti” also varied according to the importance of the news, ranging from 30 to 4,000. Generally speaking, 1,000~2,000 copies of each issue were printed in 1703 and 1704, but the number decreased to several hundred after 1705. Issues containing “Reliatsiia” (reports on the battles with the Swedes) had large circulations and a considerable number of pages. Each issue consisted of 2~22 pages.

By order of Peter I, the “Vedomosti” was sold to the public. Judging from tables made by A. Pokrovskii from the original sources of the Printing office, less than half of the copies of each issue were presented as gifts and the remainder went on sale for a price of 1~6 den’ga. Therefore we may suppose that news contained in the “Vedomosti” became quite familiar among learned people such as noblemen and merchants at least in two capitals.

The reign of Peter I was characterized by a drastic modernization of Russia. Partly out of necessity and partly out of his own personal preference Peter I, an enlightened despot, promoted the introduction of western systems, technology and industry into old Russia. At that time relatively little was known about West-European countries in Russia, and anti-Western prejudice caused by ignorance was common even among

ロシア最初の印刷新聞「ヴェードモスチ」

learned people. Therefore one of the purposes of publishing the “Vedomosti” was to acquaint the Russian people with the social situations in Western countries and to diminish opposition to Peter’s reforms. This explains why news extracted from Western news-papers occupied the largest portion of the “Vedomosti”.

The “Vedomosti” had another supportive role for Peter’s reforms. Anticipating the difficulties of realizing his ideas, Peter sought possible measures to lead his people down the road of reform. One such measure was the “Vedomosti”, which Peter I used to inform the public of the success of the newly-organized Russian army and fleet in the Northern War and to carry on active propaganda for the development of commerce, the building of factories, and the discovery of useful minerals, etc. Peter I himself took part in compiling the “Vedomosti”, selecting news from foreign newspapers, writing many letters to be printed in it, and even correcting the proofs. These facts shows that Peter I recognized the great value of the “Vedomosti”.

The publication of the “Vedomosti” was also epoch-making in the history of printing in Russia. It was not only the first printed newspaper, but also one of the earliest non-church publications. Arabic numerals were used for the first time in one of two editions of the “Vedomosti”. When Peter officially decided the type of Russian letters to be used in the printing of non-church publications in 1710, it was the “Vedomosti” that obeyed this decree at once, although some battle news was still printed in the old Church-Slavonic type until 1714. In addition the “Vedomosti” is said to have had a great influence on the popularization of new Russian written language.

It is concluded that the “Vedomosti” is a source which historians working on the first quarter of the eighteenth century should not overlook.

References

- Берков, П. Н.: История русской журналистики XVIII века. Мос. и Лнг., 1952.
- Быкова, Т. А. и Гуревич, М. М. (сост.): Описание изданий напечатанных кириллицей, 1689–январь 1725 г. Мос. и Лнг., 1958.
- Быкова, Т. А. и Гуревич, М. М. (сост.): Описание изданий гражданской печати, 1708–январь 1725 г. Мос. и Лнг., 1955.
- Быкова, Т. А., Гуревич, М. М., Козинцева, Р. И. (сост.): Описание изданий напечатанных при Петре I; сводный каталог. Дополнения и приложения. Лнг., 1972.
- Вѣдомости времени Петра Великаго. Издание Московской синодальной типографіи. Вып. 1 (1703–1707). Мос., 1903. Repr. ed. [Düsseldorf & Vaduz, 1970] (Slavica-reprint, nr. 38)
- Вѣдомости времени Петра Великаго. Издание Московской синодальной типографіи. Вып. 2 (1708–1719). [With an introductory article titled “Къ истории газеты в Россіи” by А. Pokrovskii] Мос., 1906. Repr. ed. [Düsseldorf & Vaduz, 1970] (Slavica-reprint, nr. 39)

- Есин, Б. И.: Русская дореволюционная газета, 1702–1917 гг.; краткий очерк. Мос., 1971.
- Западов, А. В. (ред.): История русской журналистики XVIII-XIX веков. Мос., 1963.
- Кацпржак, Е. И.: История книги. Мос., 1964.
- Кацпржак, Е. И.: История письменности и книги. Мос., 1955.
- Неустроев, А. Н.: Историческое розысканіе о русскихъ повременныхъ изданіяхъ и сборникахъ, библиографически и въ хронологическомъ порядкиѣ описанныхъ за 1703–1802 гг. СПб., 1874.
- Пекарский, П.: Наука и литература въ Россіи при Петрѣ Великомъ. Том 1–2. СПб., 1862. Repr. ed. [Cambridge. Eng., 1972]
- Первыя русскія вѣдомости, печатавшіяся въ Москвѣ въ 1703 году. СПб., 1855.
- Покровский, Алексей А.: Къ исторіи газеты въ Россіи. (An introductory article to “Вѣдомости времени Петра Великаго. Вып. 2. СПб., 1906”)
- Шицгал, А. Г.: Репертуар русского типографскаго гражданскаго шрифта XVIII века. Часть 1. Мос., 1981.
- Энциклопедическій словарь. (Издатели: Ф. А. Брокгаузъ и И. А. Ефронъ) Том VII^A, XVIII. СПб., 1892–1896.

図版引用文献

- 図版 1 Берков, П. Н.: История русской журналистики XVIII века. стр. 25.
- 図版 2 Первыя русскія вѣдомости, печатавшіяся въ Москвѣ въ 1703 году. [стр. 31]
- 図版 3 Вѣдомости времени Петра Великаго въ память двухсотлѣтія Первой русской газеты. Вып. 1. стр. 1.
- 図版 4 Там же, Вып. 2. стр. 237.
- 図版 5 Шицгал, А. Г.: Репертуар русского типографическаго гражданскаго шрифта XVIII века. [стр.] VII, [3]